

伊丹公論

復刊 第12号 通巻31号

年4回発行 (次号は8月31日予定)

発行所 伊丹市立図書館(ことば蔵) 伊丹市宮ノ前3-17-14 電話 072-784-8170 編集 伊丹公論編集委員会

作者も大学も青春真っ只中だった

宮本輝「青が散る」の舞台

追手門学院大学が創立50周年



テニス合宿をする、追大生時代の宮本輝さん

伊丹大使で市内在住の芥川賞作家、宮本輝さんは今年創立50周年を迎える追手門学院大学(大阪府茨木市)の第1期生であり、4年間の大学生活をもとに描いた小説が「青が散る」だ。同大学の附属図書館宮本輝ミュージアム・プログラムディレクター、真銅正宏さん(国際教養学部教授)に、この小説の背景などについて寄稿いただいた。

追手門学院は、明治21年(1888)に創設され、長い歴史を持つが、大学の設置は後れ、昭和41年(1966)になってようやく第1期生を迎えた。その中に、宮本正仁、つまり後の宮本輝も含まれていた。第1期生であることは、大学と同じ生まれ年であるということだ。彼らには先輩もなければ、前年度の授業情報もない。

宮本輝の

場合、テニス部に入学するということが、テニスコートを作ることをまじり意味した。「青が散る」の主人公、椎名燎平と、キャプテンの金子慎一は、学長に直談判し、ポケットマネーから、コートを作るためのトラック3台分の土代をもらい、高校用のグラウンドの一角に、スコップとツルハシとで、1カ月かけて、クレイコートを作らせた。手作りしたことになった。



宮本輝自身は、「青が散る」のあとがきに、「二、三、モデルとなった者もいます。が、青春という舞台の上で、思いつくまま

宮本輝ミュージアム

茨木市西安威2の追手門学院大学附属図書館内にあり、万年筆や芥川賞正賞の懐中時計をはじめとする愛用品が多数展示されている。宮本輝さんが協力する文章表現コンクール「青が散る」Awardを毎年行い、日本全国から約5000点の作文やエッセーが応募される。

現在、企画展「宮本輝の今」を開催中。9月30日まで。入場無料。問い合わせは同館 ☎072・641・9638へ。

赤穂浪士が飲んだ!? 伊丹酒



剣菱の酒樽のふたを開ける赤穂浪士(剣菱酒造の戦前の冊子より)

ことば蔵の敷地で醸造の「剣菱」

4年前にオープンしたことは蔵の外観は酒蔵を模したデザインだが、実は本物の酒蔵の跡地に建設された。その酒蔵で醸造されていたのは、江戸時代に一世を風靡し、現代に生き続ける銘酒「剣菱」だ。

剣菱は、永正2年(1505)に創業した稲守屋の酒。江戸で評判になり、江戸の人々が剣菱の顔ともいうべきロゴマークからの連想で「剣菱」と呼称し、結果としてこれが商標名になったと言われている。このロゴマークは、嘉永2年(1849)の文献にも記されている。

元禄10年(1697)、幕府による全国の酒造人の調査で、剣菱の醸造元稲守屋治郎三郎の酒造請株高(酒造で消費できる米の量)が伊丹で最大となり、同13年、治郎三郎は伊丹郷町の惣宿老(町政組織の代表)を務めた。同15年、吉良邸への討ち入りを前にした赤穂浪士たちが江戸で出陣酒として飲んだという説があるほど、剣菱は江戸中期には日本酒の代名詞的な存在となっていた。

その後、稲守屋から受け継いだ津国屋が剣菱のさらなる繁栄へとつなげていく。当時の「江戸流行名酒番付」では、剣菱が最高位である東の大関に格付けされ、文豪としても酒豪としても名高い江戸後期の歴史家・漢詩人、頼山陽や、土佐藩15代藩主の山内容堂ら幕末志士たちにも愛された。しかし明治以後、伊丹酒は衰退の道をたどる。旧幕府軍との戦いに莫大な出費を余儀なくされた明治新政府による度重なる増税や既存酒造家の営業特権全廃、ビール産業の拡大などにより伊丹の酒造家は相次ぎ廃業していった。剣菱を引き継いだ池上茂兵衛も昭和元年(1926)に廃業となり、創業以来続いた伊丹の地での剣菱醸造に終止符が打たれることになった。

私が創りあげた虚構の世界で、実際に起こった事件も何ひとつありません」と書いている。これによると、この小説の正しい読み方として、モデル探しをするよりも、どう作られているのかを読み取るべきと思われるが、追手門学院大学をよく知る読者にとり、読書の途中に、情景が目の前に広がることも事実だ。人間は、未知のものに対し、既知の情報を当てはめて理解するものだからだと思われる。

さて、大学が開設された時、初代学長に就任したのは、天野利武だった。「青が散る」では、「著名な心理学者でもある学長」という言葉で、モデルであることがさらりと紹介されている。この小説の縁もあり、現在、追手門学院大学の将軍山会館から食堂棟に向かう途中にある「初代学長 故・天野利武先生顕彰碑」の碑文は、宮本輝の筆によっている。宮本輝ミュージアムは、平成17年(2005)5月、追手門学院創立120周年事業の一環として、追手門学院大学附属図書館内に付設された。宮本輝の全面的な協力を得て、彼の原稿や作品など、貴重な資料の保管とさまざまな展示を行っている。常設展示として、宮本輝の作品はもちろんだが、年譜、愛用品、写真などから、サインや落款の入った著書、また原稿の複製などを展示する他、映画化された作品やオリジナルビデオなどのAV資料も所蔵している。さらに、毎年、さまざまな企画展や出張展示も行っている。

宮本文学・田辺文学に触れる一日に 6月26日にことば蔵で「ことば文化サミット」

本市の「ことば文化都市」標榜10周年と宮本輝さんの母校創立50周年、田辺聖子さんの母校創立100周年というトリプル周年を記念した特別講演「ことば文化サミット」を6月26日(日)にことば蔵で開催します。



午後1時から追手門学院大学創立50周年記念講演では、宮本輝では、宮本輝ミュージアム・プログラムディレクターの真銅正宏さんII写真右IIが宮本輝と小説「青が散る」の世界についてお話しします。また、6月22日から7月17日までことば蔵ギャラリーで記念展も開催。ぜひこの機会に本学に触れてみてください。いずれも参加無料。当日直接、会場へ。

に示すが、スクールカラーでもあ「青」ということになる。宮本輝ミュージアムに、ぜひ一度、

お運びいただきたい。そこには、きっと、この作家や文学をめぐる、新しい発見があるだろう。

「郷土研究伊丹公論」は、私立伊丹図書館開設した小林杖吉(筆名「丹城」)が、昭和11年(1936)1月20日に創刊し、19号まで発行された地域紙。ことば蔵では、伊丹公論を73年ぶりに復刊し、伊丹の歴史・文化を全国に発信するため、市民と共に発行しています。

憲法公布記念の兵庫県民歌があった

作詞者・野口さんは伊丹で晩年過ごす

今年には日本国憲法が公布されて70年の節目に当たるが、その新憲法公布を記念して兵庫県民歌が作られていたことを知る人は少ない。この県民歌の作詞者、野口猛さんⅡ写真Ⅱは晩年を伊丹で過ごしていた。彼の生涯を振り返ってみたい。



野口猛さんは明治39年(1906)4月22日、長崎県佐世保市で生まれ

11歳の時に家族で大阪へ移り、尋常小学校を卒業した後は職を転々としながら独学を重ねて教員採用試験に合格。最初に着任したのは川辺郡長尾村(本紙復刊第10号参照)の長尾尋常小学校(現在の宝塚市立長尾小学校)で、同校には現在の伊丹市域に当たる荒牧や鴻池からも児童が通っていた。

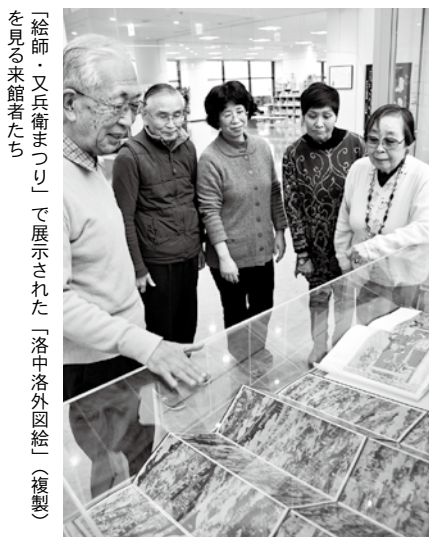
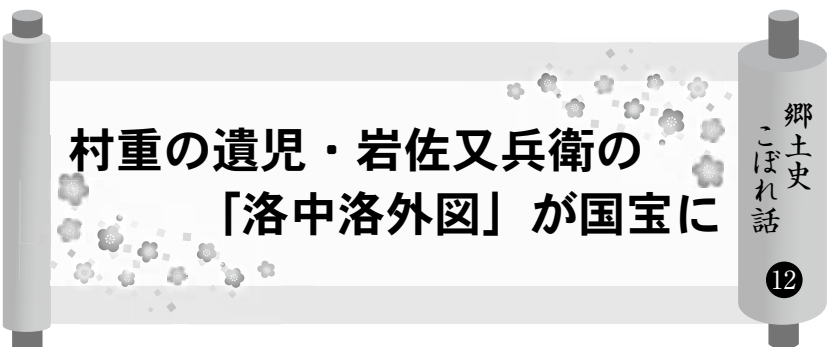
野口さんが特に力を入れて指導したのは作文で、池田で開かれていた綴方の研究会に参加するかわら、北原白秋(1885~1942年)が主催していた短歌同人誌『多磨』への投稿を通じて白秋の指導を受けている。

■県民歌に託した新時代への想い
長く苦しい戦争の時代が終わり、昭和21年(1946)11月に「国民主権」「基本的人権の尊重」「平和主義」を三本柱とする日本国憲法が公布された。兵庫県では記念事業として近畿地方で初の県民歌を制定することになり、詩人の富田碎花(1890~1984年)らを審査委員に迎えて県内外を対象に歌詞を一般公募した。

720編の応募作の中から入選を果たした野口さんの作品は、新しい憲法の公布を機に荒廃した県土の戦後復興を高らかに歌い上げる歌詞で、東京音楽学校講師の信時潔(1887

郷土史 こぼれ話 12

村重の遺児・岩佐又兵衛の「洛中洛外図」が国宝に



「絵師・又兵衛まつり」で展示された「洛中洛外図絵」(複製)を見る来館者たち

文化審議会が3月11日、国宝4件(絵画・彫刻・工芸品・書籍と典籍各1)を文科相に答申した。その絵画1件の作品は、戦国武将、荒木村重(有岡城主)の遺児とされる浮世絵師、岩佐又兵衛(本名勝以)の洛中洛外図絵である。

ニュースに郷土史仲間が歓喜に沸いた。どんな絵なのだろうか。写真などのない時代、過去の歴史の様相は書物や絵画などで伝えられる。絵は政治・文化の中心地である京都の都にぎわいを描く。6曲1双の屏風に、東山から下京辺りの景観が又兵衛独特の構成で、左右隻連続して描かれている。時期は約400年前の慶長9年(1614)元和元年(1615)。

一人の姿を実にエネルギーに生き生きと表現している。猥雑な喧騒さえ聞こえてくる。その平和な世界は父村重が願望したものであったろう。又兵衛は武士とならず絵筆で生涯を終えた。

豊臣家が滅亡し徳川家が天下を握った大阪冬の陣・夏の陣があった年だ。時代の波を対比させながら、都で生活するさまざまな職業の2728人の一

(郷土史研究者 森本啓一)

1965年)が曲を付け、昭和22年5月3日に神戸の記念祝典で初演

選挙)のセンター本に北海道中川郡幕別町の清水俊明さんをそれぞれ選んだ。

しおりんピックには、北海道や鹿児島県など全国から64点の応募があった。市芸術家協会代表幹事、北里桂一さんによる審査で金メダルに

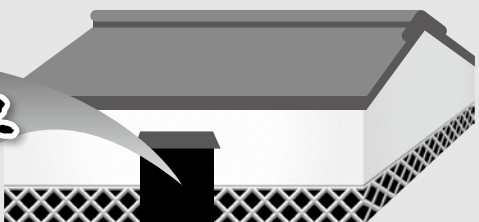
井田さん、銀メダルに横浜市磯子区の藤田愛実さん、銅メダルに姫路市の小林恭子さん、来館者の投票で決まる「ことば蔵賞」に三重県三重郡菰野町の増田木綿子さんが選ばれた。

KTBOおすすめ本総選挙は、他の人にお勧めしたい本(おすすめ本)の推薦文を募集し、栃木県や鳥取県などから10点の立候補があった。推薦文を選挙ポスターのように掲示し、来館者に読みたくなった本(推しポン)に1票を投じてもらい、投



センター本を手を受賞を喜ぶ清水俊明さん

しおり「金メダル」に井田さん 総選挙「センター本」に清水さん



ことば蔵はこのほど、本のしおりの出来栄を競う「第2回しおりんピック」の金メダルに東京都大田区の井田奈々子さん、来館者の投票でおすすめ本ナンバーワンを決定する「第2回KTBO(蔵)おすすめ本総

票総数112票のうち28票を獲得した清水さんのおすすめ本「ぼくは明日、昨日のきみとデートする」(七月隆文著/宝島社)が「センター本」に選ばれた。推薦全文文は以下のとおり。

読後、必ず読み返したくなります。それもすぐに。そして2度目は、これまで経験したことのない切なさに胸が締め付けられてきて、とても最後まで読めません。

あらすじを詳しく紹介できないところが何ともどかしいですが、思いつき切れない気分になりたいたいときにぜひどうぞ。

ただし、この本を読むと、しばらくの間、他の本に興味を湧かなくなりそうです。それをご理解した上でお読みください。

兵庫県民歌

作詞・野口猛 作曲・信時潔

一、わき立つ喜び 日本のあけぼの
長夜の眠りは 覚めたり今こそ
大道開かる 布く新憲法
ゆく手は明るし 民主の楽園
いざわれら 共に起たん
建設の 力ぞわれら
わが兵庫
二、あかき海原 みどりの山々

野の幸ひらけて 恵みはゆたかに
伸びゆく産業 港のにぎわい
いさおは継ぐべし
国土にふたたび
いざわれら 共にゆかん
復興の 先駆ぞわれら
わが兵庫
三、歴史ははるけし 文化の水上
さやけき流れに 輝く人の名
ゆるがぬ伝統 たゆまぬ躍進
使命はあたらし 世紀のこの朝

いざわれら 共に掲げん
民族の 誇りをわれら
わが兵庫
四、こぞれりこの民 祖国の再建
希望の光は 天地に満ちたり
重荷にひるまず 心をあわせて
進むはひとすじ 世界の平和へ
いざわれら 共に遂げん
永遠の 理想をわれら
わが兵庫

(橋岡昌幸)

豊かな歴史・文化遺産を紹介

市文化財ボランティアの会が20周年

伊丹市文化財ボランティアの会(火曜会)は、今年4月で20周年を迎えました。



子どもたちに勾玉作りを指導する会員たち=中央公民館で

当会の主な活動として、国指定重要文化財岡田家住宅に曜日、時間を決めて駐在するガイド、市教委を教育課に申し込んだ団体へのガイドがあります。また年に4回実施する当会主催行事のガイド、阪急電鉄など他団体主催行事の支援ガイドも行っています。

平成26年(2014)のNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」で、官兵衛が有岡城の土牢に幽閉される場面が放映されると、ガイド要請が急増、4月から6月までの3カ月間で約1800

人を案内しました。このほか、文化財に関連した各種イベントへの協賛支援活動も行っています。有志による紙芝居グループ「どんぐり座」は、小学校低学年の情操教育「心の匠授業」として毎年各小学校からの要請で出張公演を行っています。これらの活動が評価され、当会は伊丹市から「つじ賞」ふれあい教育賞「教育委員会賞」、県から「県くすのき賞」を受賞しています。

伊丹には古代の伊丹廃寺跡、僧行基が開発した昆陽池、戦国大名・荒木村重の有岡城跡、酒造業による繁栄を今に伝える酒蔵などの建物が、芭蕉と並び称された鬼貫らの俳諧文化など、豊かな歴史・文化遺産があります。これらをお客さんに知ってもらうためには、ガイドする会員も事前にしっかり勉強しておく必要があります。会設立の平成8年にガイ

ドブック「ふるさと探訪 文化財を訪ねて」を編集・発行、平成23年にはこれを大幅に改訂して「伊丹を歩こう 来て見て知って歴史と文化」を新版発行しました。平成11年に創刊した会報「火曜会通信」は年4回発行、現在69号まで発行しています。会報はことば蔵や中央公民館をはじめ、市の主な施設に配布してあります。すので、ぜひご覧ください。

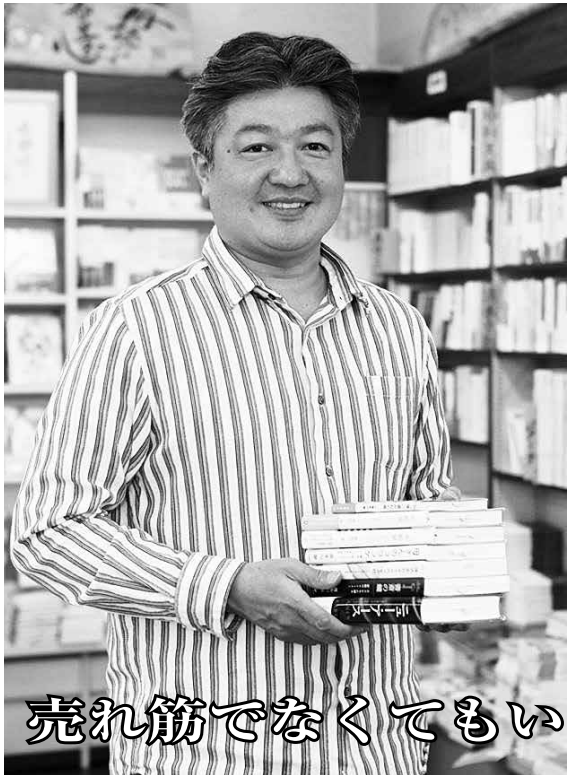
現在、会員は50余名。会員の中には、自分でテーマを決めて研鑽を続けている人がいます。また会員相互の啓発を図るため、パソコン会、歴史会、古文書会という分科会活動もあります。当会への入会は、毎年2月から社会教育課が主催する養成講座を受講して、市民ガイドを現地体験することが条件になっています。入会をお待ちしています。

(伊丹市文化財ボランティアの会 副会長 松田孝雄)

現代人物風景

出版不況にネット書店の隆盛…。まちな本屋さんがどんどん消えて行くなか、ユニークな経営で逆境をはねのけ、全国的に注目されている書店の店主が伊丹にいます。

元はJR伊丹駅前にあった地域チェーン書店の店主。平成15年



売れ筋でなくてもいい本を

写真協力=西田写真館

ブックランドフレンズ店主 河田 秀人さん(45)

「2003」の店の経営を引き継いで独立した。開店当初、同駅東側にあるダイヤモンドシティ・テラス(現イオンモール伊丹)が女性、子どもがメインと読んだ河田さんは、商品構成を自身の趣味のバイクや歴史、ミ

リタリー系など中年男性向きに変えてみた。すると、売上は順調に伸びた。しかし、平成17年のJR福知山線脱線事故を機に客足は遠のいた。そこで駅前という立地に振り回されないう、大手とは違った

(豊田政志)

老舗探訪

鮎千寿

伊丹市伊丹1丁目13番56号 ☎072-782-3084

JR伊丹駅前にある創業42年の寿司と日本料理の店。父親と息子二人が職人として腕を振るっている。ランチの上寿司セット(税込2300円)を頼むと、赤だし、デザートが付く。文句なくうまい。特に鰻は香ばしくて、どんな鰻専門店でも食べられないおいしさだ。また、大阪木津市場の本マグロを使っている、一口食べるとマグロのうまみが染み出てくる。



(38)は、辻学園調理・製菓専門学校卒業後、各地の和食、割烹料理店を修業し、父親の店に入り和食のバリエーションを増やした。和食の道に進んだのは、和食漫画「美味しもの王国」の影響だという。修業中は上下関係がとて厳しく、殴られるのが当たり前だったそうだ。カウン

ターに立つ卓也さんは、苦勞を重ねた職人の顔だ。この店は元々、JR伊丹駅前にあったが、再開発で現在の場所に移った。老舗らしく落ち着いた雰囲気があり、一見高級そうだが、一見客にも親父さんが声をかけ、入りやすい。エコロジーに配慮していることも特長の一つ。ネタケースや生簀、冷蔵庫などに井戸水を利用し、節電に

「遠くても行きたくなる本屋」を目指すようになった。試行錯誤の末、自身が読んだ書籍を推薦文のポップ広告にすると、立ち止まって購入し、後で感想を言いに来ってくれるリピーター客が現れ始めた。次第に「人に配りたくなる本を紹介する本屋」のうわさが京阪神、そして東京、北海道、沖縄までとどろいた。既存の業界の常識にとらわれず、売れ筋でなくても、いい本を発掘し、伝える本屋が生き残れることを証明した。

卓也さんが考案した寿司ケーキは大人気だという。料理の質は一切落とさず、新しいことにもチャレンジし続けている。(細尾哲也)

郷土産品紹介

昔ながらの手焼きおかきが絶品

伊丹市高台の閑静な住宅街にある知る人ぞ知るおかき屋。今年10月に創業50周年を迎える。現在の店主は2代目の中島光一さん(46)だ。国産の材料にこだわりをもち、米はもちろん、大豆や海老、海苔などの素材も一つひとつ厳選。おかきにとつてより良い素材を常に探し求めている。

製造工程で最も気を遣うのが生地作り。湿度や気温によって出来上がりが左右されるため、常に天候を気にかけている。職人ならではの勘が頼りだ。おかきは一枚一枚いいねいに手焼きをして、秘伝の白醤油やたまり醬

油、塩などで味付けをしている。商品は9種類。おかき好きにはたまらない菌ごたえのある昔ながらの「中の島」や「海老錦」などがある一方、パリパリとした食感が癖になる口当たりの良い「海老あられ」や「珍味」(各100g入り)もある。絶品の味を求めて遠方から買いに来る客もあり、地方発送もしている。JR伊丹駅改札口横の伊丹市立観光物産ギャラリーと中野西のサンシティホール内の「ショップ愛」でも買える。(辻野文三)

中島製菓 伊丹市高台1丁目143-1 ☎072-782-4665

伊丹俳壇

「ことば」 坪内稔典 選
(佛教大学・京都教育大学名誉教授、
柿衛文庫也雲軒塾頭)

最優秀賞

新聞紙テントウムシが歩いてる
かつらいす (神戸市)

「俳句短歌ライブ」はそれぞれの詩型の特色が際立ってとても盛り上がった。今回の最優秀句はそのライブでの作。新聞の字がテントウムシに変身した感じ。テントウムシの歩く音まで聞こえてくるではないか。

優秀賞

言いかけたことが溶けるソーダ水 えんどうけいこ (埼玉県狭山市)
ひとことと言うとぞっこん若葉風 芳賀 博子 (神戸市)
空豆にビールがあつて大津も 正野ゆう子 (大阪府豊能町)
錦織は負けたのこの欠伸 弘津 彰子 (大阪府茨木市)
白薔薇と共犯になることば哉 SEIKO (滋賀県守山市)

伊丹歌壇

「ことば」 尾崎まゆみ 選
(「玲瓏」選者、神戸新聞文芸短歌選者、
現代歌人協会会員)

最優秀賞

ヒトヨタケ一夜で消える菌類の胞子あなたのコトバにかけろ
山本 純子 (大津市)

一夜で消えて欲しい「あなたのコトバ」とはどんな言葉だろう。上旬のなめらかな調べをロザミながらいろいろ言葉葉を当てはめるのは楽しいが、びったりはまるコトバはたぶん寂しい。だから胞子が欲しいのだ。

優秀賞

手招きをするかのように鮮やかなさみの言葉に水底を蹴る
松井 幸子 (山形県鶴岡市)
雪の夜の祖母の間よりこぼれくるどの睦言も撰津の詠り
澤井みのり (東京都あきるの市)
羊の毛剪るやうにまた忘れられてゆくことばたち地面を這いぬ
小田 和子 (明石市)
つぎつぎにサラダに降りてゆくチーズ紋白蝶が退化している
秋本こゆび (神戸市)
マネキンのヌードの森に迷い込みノゾキ禁止のことばふりさる
秋山 泰 (京都市)



次回の兼題は、俳壇は「頭」、歌壇は「夏野菜」とします。応募は1人各1作品、自作未発表作品に限る。応募締切は、7月15日(必着)。最優秀賞には図書券千円進呈。左のQRコードを利用すると、ケータイからも応募できる。問い合わせは、ことば蔵へ。

タンジョー先生 はげやよい



林やよい
伊丹市在住。毎日新聞兵庫版にイラストエッセイ「くるまいますまい」を連載中。

俳句短歌ライブで白熱バトル



左から坪内さん、かつらいすさん、山本さん、尾崎さん

「ことば文化都市伊丹」10周年を記念して5月15日、ことば蔵で「俳句短歌ライブ」が開かれた。
57人が参加。講師を務めた朝倉晴美さんと田中ましろさんの案内のもと、今号の伊丹俳壇・歌壇に投稿する作品を作り、坪内稔典さんと尾崎まゆみさんが対決形式で講評を行った。イベントで生まれた171点に事前投稿作品209点を加えた選定の結果、当日参加したかつらいすさんと山本純子さんが、それぞれ最優秀賞に選ばれた。(牛隆祐)

コスプレで楽しくお掃除

路上喫煙等防止条例施行機に活動



人気アニメのキャラクターなどに扮したコスプレヤーたちが本市の中心市街地で掃除をしたりビラを配布したりする姿が時々見られるようになってい
伊丹市路上等の喫煙及び吸い殻の散乱の防止に関する条例中に、「市民等による自主的な活動」の一条が加わったことから、コスプレを趣味とする市内の若者が昨年6月「みんなでやろうよ!



コスプレクリーンプロジェクト(通称コスプレおそうじ隊)を結成、市の公募型協働事業提案制度に応募して、啓発や清掃活動に協力しているものだ。
3月19日には伊丹市などとともに「いたみクリーン作戦」を実施。飛び入り参加も含めて14人が思い思いのキャラクターに扮し、ほうきやちりとりを手に参加、他の市民団体のメンバーらと一緒にJR・阪急伊丹駅前などを清掃した。写真。
コスプレおそうじ隊は、各種イベントの開催に合わせて年6回程度、中心市街地の掃除や啓発活動を行うことにしている。

リーダーの会社員、山崎敦子さん(28)は「趣味のコスプレが、大好きな伊丹のまちづくりに生かせるのがうれしい。コスプレをしない人も

佛山市駐在の伊丹市職員に迎えられ、交流センターに着いた。歓迎会では、みな必ずネクタイを結ぶようだ。「カペンペイ!」(日本の「乾杯」)でお酒を飲み干した後は、グラスの底を周りに見せる。いや、見せなくてはいけないのである。私は調子に乗ってビールや紹興酒を10杯近く飲んでしまった。
宿泊先のホテルの裏は市場であったが、「えっ、ここは動物園じゃないの!」と驚く。いるわいるわ、ニワトリ、ウコッケイ、アヒル、ヘビ、カエル、タウナギ、ハト、カメ、ブタの顔、そして何かわからないが、ぶら下がっている肉の塊。生きているものは

元おかみの きまぐれ つらム

市場の光景にビックリ ~中国・佛山市への旅(中)

籠に入っていて、買うとすぐに羽根や皮を処理してくれる。朝食は巴さんのぶつ切りが入ったお粥で、恐る恐る口にしたが、これがうまい!
道端にはスイカ、ウリ、カボチャなどが山積みになっていた。近頃は日本でもあるが、黒い皮のスイカもあった。でも中は赤色だった。それに、ライチに似た龍眼という果実を買った。ひと籠300円だったと思う。これがまた美味で、伊丹に持って帰りたいが、丹に持って帰ったが、ダメですと通訳の方に言われた。
(次号へ続く)
(平きみえ)



今号は5月末日発行で梅雨入り目前。酔後録も酒ネタで一つ書いてみる。
▼初呑み切りって?
「初呑み切り」という言葉を聞くだけでよだれが出そうなのは拙者だけだろうか?
冬から春にかけて造られた酒は、蔵の中で貯蔵され、この梅雨や暑い夏を経て調熟されていく。無事に調熟が進んでいるかどうか、蔵元や杜

氏は心配でならない。その確認をするのが「初呑み切り」である。
通常、5月末から6月にかけて行われる。ここでの評価がその後出荷するお酒に大きな影響を及ぼすため、酒蔵にとって重要な行事となっている。
貯蔵中しっかりと封印されている「呑み穴」という桶の排出口を「初めて切つて」開けて引き出すことから、そう呼ばれるようになったという。ああ、やっぱり、よだれが出る。それを呑みたい...
▼常連扱いされて♪
初呑み切りはやむを得ず断念するとして、酒飲みにとって最近いいことがあった。
日本酒の揃えが良く、アテも美味しいので、何度か訪れた店がある。酒の注文がうるさいからか、顔を覚

